

これは、また、大したものだ。いつお前は『詩經』をそらんじたのかね。

巴童「先生が『論語』を読んでいて、孔子にしてはいいことをいう、とおっしゃってたではありませんか」

なるほど。そうか。「予を起すものは」商ではなくって、巴童、お前だ。「始めてともに詩をいふべきのみ」門前の小僧もここまでくれば大したものだよ。

巴童「いまのはどうやら本気でほめてくださったようですね。まだ何やら言いたそうにしていらっしゃるのは、なんですか」

お前の引用した『論語』の次の条に「殷の礼は、われ能くこれを言えども、宋、徴とするに足らざるなり。文献たらざるが故なり」ということばがある。さっきわたしのいった宋の話も、たぶん世の学者は信じるまい。楞伽の話となれば、なおさらだ。なにしろ文献がたりないからな。だがお前とわたしの対話のなかでは、シャクシジウギな学者連中を迷わせるために権力者が抹消しておいた文献が、思いもかけぬ姿であらわれてくるから面白いのだ。だから草木も、眼に涙のたまるほど、笑いこけているのだらう。

世尊と夜叉王

—楞伽經雜記—

一切法不生 亦不得言無 乾闥婆幻夢 誦法無因有
依言語聲 証離言語 入自內身修行義

法身品
信心品

一

楞伽經にわたしを導いてくれたのは、李賀である。かれは「陳商に贈る」詩に「楞伽は案前に推く、楚辭を肘後に繋けぬ」とうたう。楞伽は仏典中の特異なものとして知られ、李賀もまた特異な作風の詩人として有名である。このふたつの特異の結びつきは、たんなる偶然か、あるいは内的関連によるのか。

李賀世界から楞伽世界をのぞいて見えてくるのは、唐の皇族であつたかれの祖先（李神通は李孝遠と皇室とのねじくれた関係であり、中国人の天に対する信仰とその信仰を背負つて国家を掌握する天子なるものの権力構造にむけるかれの苦にがしい感情である。「楞伽—李賀小記—」人文論叢14・一九六二年十二月。「李神通」本誌3・4「唐の太宗」同5）楞伽世界から李賀世界をながめると、そこに幻出するのは、楞伽經の説主「世尊」と対告者「夜叉王」とのいりくんだ関係であり、侵略者と被侵略者の晉祿とその起死への悲願であ

る。

楞伽經にはしばしば鏡と影像の譬喩を説く。楞伽と李賀は、譬喩そのままに、むきあえば相手のうちにおのれの姿が見えるふしぎな二つの世界である。世尊はみずからの内部であかした悟りをことばに展開することによって夜叉王を救った。夜叉王の救われたことによつて世尊のことばの眞実が仄知せられる。これが、楞伽經の主題であろう。詩の鬼とよばれる李賀が、楞伽を案前においたのは、この經の幽旨を感受し、夜叉となったかれの祖先の靈をとぶらい、かねてみずからの魂魄を救おうとしたのであろうか。

楞伽經の漢訳に次の四本が著録される。題名・巻数・訳者・訳処・訳時・（略称）は、

楞伽經

四卷

曇無讖 Dharmakṣema

姑蔵

四二一—四三三

（涼訳）

楞伽阿跋多羅宝經

四卷

求那跋陀羅 Guṇabhadra

金陵

四四三

（宋訳）

入楞伽經

十卷

菩提流支 Bodhiruci

洛陽

五一三

（魏訳）

大衆入楞伽經

七卷

実叉難陀 Śikṣānanda

洛陽

七〇〇—七〇四

（唐訳）

涼訳は舊代初期にすでに散佚していたらしい。梵本は、

Ārya-Saddharma-laikāvatāra nāma mahāyāna sūtram.

と題し、十九世紀なかごろネパールの首都カトマンズで発見され、南条文雄が校訂し、南条のこれにもとづく和訳、鈴木大拙の英訳がある。唐訳は構成においてこれに近いといわれる。チベット訳に次の二本がある。

hPhags-pa Lan-kar gGegs-pa Theg-pa chen-pohi mDo.

hPhag-pa Lan-kar gGegs-pa Rin-po-chehi mDo-las Sans-rgas Thams-cad-kyi gsum-gi Sninpo

Shes-bya-bahi Lehu.

前者は梵本に近く、後者は宋訳からの重訳であろうといわれる。唐訳に關与した法蔵は、
へ今すなわち五梵本を詳かにし二漢文を勘え、その得るところを取り、その失うところを正
すという。則天武后が唐訳を命じたとき、梵本は、いまのこるチベツト二訳をそこに入れ
ても、なお他に三種、洛陽にあったことになる。李賀は、二漢文・五梵本および唐訳のい
れを読んだのであろうか。かれが梵語・チベツト語を知らなかつたと断定する証拠はない。
熟達するほどではなくとも、そのかたはしには触れていたかもしれぬ。しかし、楞伽經に對
するかれの理解はまず漢訳によるものと見るべきであらう。前稿で、李賀の読んだ楞伽經は
魏訳であらうと推測した。三本のうち最も詳密で、夜叉に關する記述の最も深切であること
が、その理由のひとつである。

ところで、三訳のうち早く訳されよく読まれた宋訳には、夜叉に關する部分すなわち魏訳
(唐訳)の諸仏品(羅婆王勸請品)がなく、さらに陀羅品(同一總品(偈頌品)もない。こ
れらのことから、その部分を後代の附加すなわち後分だとする説が有力であり、夜叉に關す
る部分は蛇足だと断定する者さえいる。

大部の經典が一時に成立するのではなく、長い期間に増広して現にみる形となつたろうこと
は見やすい理である。諸經の成立史が先進の尊い努力によつて明らかにされつつあり、經典

の内面理解に貢献している。ただ、成立史家のなかには、經典の原始分を尊重するあまり、後分をその經の非本質的なものとして輕視する傾向がないではなく、楞伽經についても殊にそれを感じる。

經典の成立は、近代の著作のそれとは必ずしも同じではない。信仰者の集團すなわち教団のなかで、信條が要約されて經典と認められ、口誦で伝持され、やがて文字に書写される。書写の段階で、口誦された經典はさらに簡約されるであろう。伝道者はこれを信者や学修者に伝えるとき、經典の求歴や注解を口頭でしたはずである。初期には口承でたりた注解も、教団の拡大分裂の過程で、これを文字化して經典中に包含せしめる必要が生じる。經典のいわゆる後分には、そのような性質のものがかなりあったはずである。創作がないわけではない。偽經の少なからぬことによつて知られる。後分が、しかし、しばしば言われるように非本質的であるとは限らぬ。教団の性格によつては、むしろそこにこそ最も重要な教えがあり、重要であるがゆえに長く口頭で伝承され、その文字化がおくれた、ともいえる。楞伽經のいわゆる後分、ことに請仏品は、まさにそのような部分だと推察する。楞伽經みずからそれを証しているではないか。八言說離眞實 眞實離名字 我得眞實處 如實內身知（系二四）法品と、楞伽經の研究は、梵本やチベット文献との対照が綿密に行われはじめ、飛躍的に前進したようである。だが魏訳請仏品の詳細な検討はまだ管見に入らない。対応する梵本・チベット文献の現われないことが一因であらうが、魏訳の漢文の読みにくいことにも関わりがある。法蔵はこれを批評して八字を加え文を混えたれば、意に泥んで或いは錯あるを致し、遂

に明明たる正理をして滞るに方言をもつてせしむVといった。魏訳はたしかに錯簡もあり竄入もあるかもしれぬ。けれども、方言すなわち梵語の音訳の多いのは、訳者の深意に出るのであって、これあるがゆえに、宋・唐面訳が失った幽微の玄旨を、千五百年のちの今日にいたつてなお、追尋しうるのである。專家が手をやけぬところに触れるのは躊躇されるが、楞伽經が釈尊の教へのひとつの顯現ならば、その慈悲をこつむって愚弱の生をいとなむ者が、おのれを効まして、夜叉王ははたして楞伽經にとつての蛇足か、李賀は楞伽經によつて救われたのか、……と、まぼろしに似た問いを發することも、許されるであらうか。

二

楞伽は、ランカー *Laṅkā* すなわち今のスリランカ、かつてセイロンとよばれた、島国の名である。その開国と仏教伝来については『島史』 *Island History* 『大史』 *Great History* がくわしいが、ここではまず簡明な佐々木教悟「スリランカの仏教」(アジア仏教史インド編VI)から本稿に必要な事項を摘記する。

スリランカは古来「インドの冒険に輝く真珠」と讃えられる。インドの南端とポーク海峡をへだて、インド洋中に北緯六度から十度に南北に横たわり、面積約六万五千平方キロメートル、わが四国と九州を合わせた広さに等しい。アダムスピーク *Adam's Peak* をふくむ諸高峰が中央山地を形成し、東北斜面はしだいに高度を減じて海二〇〇メートル以下の丘陵および台地

を形成している。中央山地に源を發した河川は、ほぼ放射線状に分布している。總体的にいて、全島は陽光輝く緑に包まれた島という印象を与える。

原住民はヴェッタ族 *Vettas* と呼ばれ、短い縮れた頭髪と、やや長い頸と、平たい鼻とをもった人種で、主として狩獵による生活を営んでいた。南インドの先住民といわれるイルラ族やクルンバ族と同系統で、スマトラ、セレベスの原住民とも関係があるといわれる。

紀元前六世紀ごろ北インドからアーリヤ系の言語を話すシンハラ族が移住し、この島をシンハラッドヴィーパ *Sinhala-dvipa*、もしくはシーハラ・デーバと呼ぶようになった。タンバパンニー（銅掌島）タブローバーナなどの名もあり、インドの史詩『ラーマヤーナ』 *Ramāyana* では *Lankā-dvipa* と呼び、仏典も多くこれを用いる。

伝説によれば最初の移住者の頭ヴェジャヤはインドのラーラ国の王子だった。乱暴なため追放され、この島に上陸し、夜叉を征服して島内を平定した。インドのマドゥラ国から妃を迎えたが子がなく、故郷のラーラから養子をとリ、その妻に釈尊の叔父の孫を迎え、シーハラ国を建てた。 * *Vijaya* .

ヴェジャヤの来島を釈尊入滅の年としたリ、釈尊との血縁を織りこみ、その開国を權威づけようとしているが、これは史実とはいえない。夜叉というのはヴェッタ族を指すらしい。スリランカの仏教徒は、釈尊が生前に三度来島したと伝えるが、これも認めがたい。仏教は釈尊の滅後、仏弟子の時代に徐々に伝えられたのである。文献の示す初伝は、アシヨカ王の子（一説に弟）のマヒンダ長老が、デーヴァアーナンピヤ・ティッサ王（前273）の治世に

衆僧に、王は最初の仏寺マハトメーガヴァナ（大雲林）を寄進した。これがのちにマハトメーガヴァナ（大寺）となった。

前一世にヴァッタガーマニ・アバヤ王がジャイナ教寺院を壊し、仏教寺院を建てアバヤギリヴィハーラ *Abhayagiri vihāra*（無畏山寺）と名づけた。この寺の僧は自由主義的で、大寺を離脱し別派をひらいた。このころ大寺派では暗誦で伝えた經典を文字に書写した。

三世紀のはじめごろ、方広派 *śrāvakas* なる大乗教徒がインドから来て無畏山寺に拠った。かれらは伝持した般若經などをよりどころとし、大乗の空思想を強調し、なかには八仏世尊は人界に住したといわれず、八仏世尊によって法は説かれなかった、などと主張する者もいて、大寺派のスリランカ上座部から異端視された。

四世紀のはじめゴータバヤ王は無畏山寺に住む方広派の僧六十名を破門し対岸のチョラ国へ追放した。竜樹の弟子アーリヤデーヴァはランカー出身といわれる。インドのダンマルチによって伝えられた法喜部、この部から分れてサーガラ長老 *Sāgara* を中心に一派をなした海部はいずれも方広派の伝持する經典を採用したといわれる。なかごろ、マハーセーナ王の信頼をうけて大乗仏教を弘めようとしたサンガミッタ比丘の活動によって、大寺派は圧迫を受け中央山地のマラヤ *Malaya* や南東部のローハナ地方に逃れ、大寺に比丘の住しないこと九年に及んだ。この期間に、大寺境内にジェータヴァナヴィハーラ *Jetaavana vihāra*（祇多林寺）が建立され、海部の徒が止住した。

五世紀に入ると、ランカーとインドおよび中国との間における僧の往来がにわかにしげく

なった。法顯は四一〇年ごろ来島し約二年無畏山寺に滞在した。末訳の訳者グナバドラもこの寺で修行したものと考えられる。

以上のことを予備知識とし、まず楞伽經全体についての仮説をのべ、ついで魏訳請仏品を翻訳注解するからちで、本經の主旨ないし成立事情をさぐってみたい。仮説のうち二二で解きほぐし得るものはわずかであろう。仮説は次のとおりである。

1 楞伽經は、ランカーの、ラーヴァナ^{रुद्र}（羅婆那）信仰をもつ人たちが、仏教を受容する過程で成立したのである。

2 ラーヴァナは、ランカーの原住民ヴェッダ族の祖神で、太陽神の系譜に属するだろう。

3 インドから来たシンハラ族が、ランカーを侵略し、ヴェッダ族を「夜叉」^{यक्ष}ないし「龍」^{नैऋत}と呼んだとき、ラーヴァナは「夜叉王」に転落した。

4 シンハラ族は、インドから仏教（上座部）の比丘団を迎え、これと結んでおのれの侵略を正当化しようとし、比丘団はこれを累した。

5 のちに大衆仏教がランカーに入り、上座部を批判し、ヴェッダ族にも伝道した。

6 仏教をまずうけいれたラーヴァナ信者はおそらく、純粹のヴェッダではなく、シンハラとの混血で、そのいずれからも差別された人たちであろう。

7 かれらが受容したのは、方広派の大衆仏教だったが、これにも全面的には同調できず、

みずから教団を結ぶようになる。そのひとつが楞伽教団である。

8 教団名の「楞伽」は、地名としてのランカーをさすとともに、象徴として「差別の根源」というほどの意味をもったであろう。

9 教団員は、歌舞・音曲・奇術・曲芸に従事するものが多く、あるいは初期教団は全体が一つの劇団であつたかもしれない。

10 教団の信条は「如来の自内証を信行する」というほどの簡素なものであつたろう。

11 祭儀・集会には、教団の歴史と信条を織りこんだ劇を演出歌唱したであろう。劇団として巡業するときにもこれを主要外題としただろう。そのうちの中心的なものがのちに「請仏品」としてまとめられる。楞伽の経典としての本質部分である。

12 信条が簡素で、それを論義としてではなく歌劇として表現した初期教団にも、そのためかえて、当時のランカーに存在したあらゆる教団宗派から批判や質疑が放たれたであろう。楞伽教団は、外部に対して公然と論争することはなかったであろうが、内部では、個人あるいは小集団でこれを検討し解答を出し、これを教団の集会にもち寄つて、みずからの信仰に資したのである。あるいはこれもまた命題ごとに寸劇や小曲に仕立てて舞台上に上せたかもしれない。この資料の集積が請仏品以外の諸品で、文字に書写されたのは請仏品に先立つだろう。しかし性格からいえば論疏すなわち研究・注解に相当する。

13 教団は、比丘教団に対して批判的で、本経編集にあつて、かれらのするような教義の形式的体系化はめざさなかつたであろう。

14 楞伽經全体は八無組織に縫合された覺書の聚集Vと評されるが、讀仏品は首尾一貫し、他品がこれを種々の角度から注釈しているので、決して無組織とはいえない。他品のみをとりあげると一たとえば宋訳のように一錯雜した感はあるが、これはむしろ八當時のランカーに焦約的にあらわれたインドの思想界全体の雑多な状況が正確に写っているVとみるべきであろう。

15 本經は、般若經・法華經・勝鬘經などの大宗諸經典を先行經典とするが、内面的にも、とも近いのは華嚴經であろう。華嚴經もまた当時のインド思想界を写しているが極めて体系的である。楞伽經の一見八無組織Vなところにその教団の革命性をみることができ、16 本經の成立時期は、三世紀のはじめから五世にかけてであろう。『ラーマヤナ』の成立にはやや遅れ、ランカーの歴史でありまたその仏教教団史である『島史』『大史』の編纂とほぼ並行する。

17 本經は、世俗的・心情的には16の三書を批判し、本質的・信仰的にはこれを超えようとしたのであろう。

18 楞伽教団に属する人たちは、ランカーから追放されあるいはみずから脱出するようなことがあったであろう。本經がランカーで滅び遠隔の地に伝持された理由の一斑はここにある。

19 伝持者のランカー離脱の時期の相違などの関係から、幾通りものテキストがあったであろう。現存諸本にみられる相違は、伝持の諸事情と翻訳時の諸事情とを反映する。

20 漢訳三本のうち楞伽經の発想を最も正確に伝えるものは魏訳であり、初期テキストを抄出・翻訳したものが宋訳であり、後期テキストを最も中国的に変容したのが唐訳である。

三

請 仏 品 仏をたまねきする章

1 歸命大智海毘盧遮那仏、

大智の海なるヴァイローチャナに命を捧げます。

これは帰敬偈である。梵文・パーリ・チベットの経典には巻頭にこれをかかげるものが多く、漢訳ではつけない方が多い。ボデイルズの翻訳は、原典にないと察せられるもの以外はみな訳出している。これはかれが訳業において原典に忠実であつた一つの現われだ。

この偈は宋・唐訳にはなく、梵本には偈はあるが文句が違ふ。魏訳のみが伝える重要な句である。その第一は帰敬の対象がヴァイローチャナ *Vairocana* (毘盧遮那仏) であること。第二はそれがバガヴァット *Bhagavat* 「世尊」でないことである。旧「華嚴經」に、

八かの諸菩薩はこの光を見おわりて、蓮華嚴莊嚴世界を觀ることを得、仏の神力のゆえに光明の中において偈を説きていづく、無量劫海に功徳を修し、十方一切の仏を供養し、無辺

の衆生海を教化し、盧舎那仏は正覺を成す。大光明を放ちて十方を照し、諸の毛孔より化身の雲を出し、衆生の器に随つて開化し、方便清淨の道を得しむ。仏は往古生死の中において一切の諸の群生を調伏し、一念の中において悉く解脱せしむ。……盧舎^{ルサ}那^ナ大智海は、光明普く照して量あることなく、如実に道諦の法を觀察して、普く一切の法門を照す^{照すは盧舎那}。という。ヴァイローチャナが太陽神であることは知られている。歴史上の人なるシャカが太陽神信仰をどう考えたかはともかく、『雜阿含』第二十二に八諸の闇冥を破壊し、光明は虚空を照す。今の毘盧遮那、清淨にして光明顯^{ミツク}というところからすれば、かなり早くから仏教はこれを攝取していたのである。華嚴や楞伽よりのちに成立した經典であろうが、『梵網經』卷上に入わね化して千の衆生となり千世界に廻る^{ミツク}といふ、『觀普賢菩薩行法經』に八劫迦牟尼を毘盧遮那通一切処と名づく^{ミツク}といふところからみれば、太陽神とシャカとを接合し、ある場合にはシャカをヴァイローチャナの化身とみ、ある場合には両者をまったく同一視したのである。

ランカーの原住民の神ラーヴァナが太陽神系諸中のものであることを反説で述べた。ラーヴァナの普通名詞^{Devanā}に字書は八啼泣の原因^{Devanā}といふがこれは明らかに『ラーマヤーナ』にもとづく。語源的にはおそろく^{Devanā}である。DevanāはDevanāの俗語形^{Devanā}に^{Devanā}が加わり^{Devanā}となり、^{Devanā}音がひかれて消滅したのではないか。^{Devanā}は、火・熱・愛・熱望・速度・光輝・光耀などの意。^{Devanā}は、恩恵・保護・満足・愉悅・快樂など。^{Devanā}は、与える者・生産者などである。これらの意を合したものは、まさに太陽に

こそふさわしいではないか。征服せられて長く人間以外のものとされた民族の歴史は、征服者の神話にあらわれる「惡鬼・凶獸」の様態からある程度推知しうるものであることを、わたしは現代史と中国古代史から学んだ。ランカーについても同じことがいえるのではないか。その際、楞伽經は「惡鬼・野獸」の側から書きのこした極めて貴重な資料であり、ことにこの帰敬偈はそれを解くカギでありうるだろうことを記しておきたい。

仏教が太陽神信仰を攝取し、そこから莊麗に展開した經典の代表が華嚴經だが、他にも種々あるうちの特殊な一經が楞伽だといえよう。華嚴の体系的なものと反対に、非体系的なのが楞伽で、それは華嚴教団よりも信仰的・實踐的・進^{シュ}的であつた楞伽教団の性格に由来するであらう。

体系性というものは權力がみずから保守するときにより出すもののように感ぜられる。体系化の進むところには權力の意志が働いている。大衆仏教の最も危険な處は、体系化に手を貸し、權力を美化する役割をみずから荷なおうとする傾向のある處であらう。

余談ながら、法華經もまた体系的性格のつよい經典である。その法華經が、原始分から後分を増広してゆく経過を、學者のなかには「不純化」とよび「蛇足」と批評するひとがいる。後分の各章を單獨でなめると、墮落としかいえない要素を含むことは確かだが、それが加わることによつて、法華經全体は原始分に強烈だった体系性が打破され、生きてゐるものの乱雑さが展開し、革命音がおちいりやすい自己絶對化を内部からつきくずす契機を設定しえたのであらう。そうでなければ、ちぐはぐな法華經はうるわしい華嚴經より早く人々の手か

遠ざかったであろう。

楞伽三訳をみると、宋訳には、請仏品にあたる部分は最初の数行を保存するだけで他は闕くけれども、そこには、この部分は口伝すべき密旨だとして護む配慮がうかがわれる。唐訳はなると請仏品にあたる羅婆那勧請品が保存されているにもかかわらず、本経の本質的な部分と二次的な部分とがまったく見あやまられる。こうして楞伽は信仰者の手をはなれる。唐訳の訳者シクシャーナンダは粗訳をつくったのみでこの訳業からはなれ、あとは中国の僧と弥陀山というトウラの僧とによって再訳したといわれる。そこにシクシャーナンダと武后の意をうける唐僧との間における楞伽に対する根本的な意見の相違があったことを推察しうる。唐訳に關与した法藏の口を極める唐訳礼讃と、唐訳の楞伽に施した変容とが、このことを側面から証する。唐訳の成立は、楞伽を見る目の顛倒する時期に符合する。禪宗六祖の慧能が楞伽經において金剛經をとったと伝えられるが、かれの付法が唐訳成立の前後であったことは極めて示唆的である。

さて楞伽がなぜ帰敬偈を「世尊」に対して捧げないのか。最大の理由は、本経の主題のひとつが、「世尊」とは何か、を問うにあったからであろう。

『島史』『大史』はその帰敬偈に八かの世尊、佛陀等正覺者に帰命す」と唱える。かれらのいう「世尊」がまことの世尊ならば、かれらが「夜叉」すなわち悪鬼とおとしめる者には世尊の教えをうけいれる余地はない。「夜叉」の王のラーヴァナは永遠に「悪鬼」である。「悪鬼」が永遠に悪鬼でなければならぬ世界で、「人」はまことに人であり、ボサツとなり、